昔、川沿いにあったお店

◆川で仕事をする

紺屋（染物屋）の仕事にとって川は切っても切れないもので、川がなければ紺屋の仕事はできなかった。

染め上げた反物を桿につけて川水の中でふり、余分になったあくを流していた。反物は長さが約12mもあって、川の流れの中でなければ、この仕事はできないものだった。

川底が浅くなると仕事がやりにくくなり、川ごみなどもつき易くなる。そのため、朝早く起きて、人の出ないうちに川ざらいをして川を深くし、川をきれいにしておくことも大切な仕事だった。

川水は夏場になると当然少なくなり、川水を使うための川戸は二段になっていて水量の少ない夏と多い冬で使い分けていた。当時の新発田川は川幅もあり、水深もあって水もきれいだったので、紺屋にとっては大切な川であった。

◆川で魚を飼う

新発田川の両岸には鯉を飼う生簀があり、生簀は川の中に箱を入れた形状だった。川の水位が上がると鯉が逃げてしまうため、蓋を付けていた。家によっては、屋根を付けていた場所もあった。個人的に趣味で小さな生簀を入れている家もあった。

◆水車で粉を引く

新発田川の上手で旧上鉄砲町の裏にあたるところに粉屋の水車があった。本流に堰を作って自家の水車小屋に水を引き込み、水車を廻していた。水車を廻した後は、川に戻す形式だった。

主に穀類（もち米や大豆）を粉にしていた。水車は昭和初期の電気が普及するまで、よく使われていた。

◆川で水を汲む

水道のない時代、井戸を持っている家も少なかったので、桶屋というのはいい商売だった。水は川から汲んでくるか、井戸から汲んでくるかであり、いずれにしても入れ物は桶だったからである。

天秤棒で担ぐ水汲み桶、手桶、つるべ、ひしゃく、行水たらい、風呂桶、そのほか水に関係のない入れ物も、ほとんど桶だった。

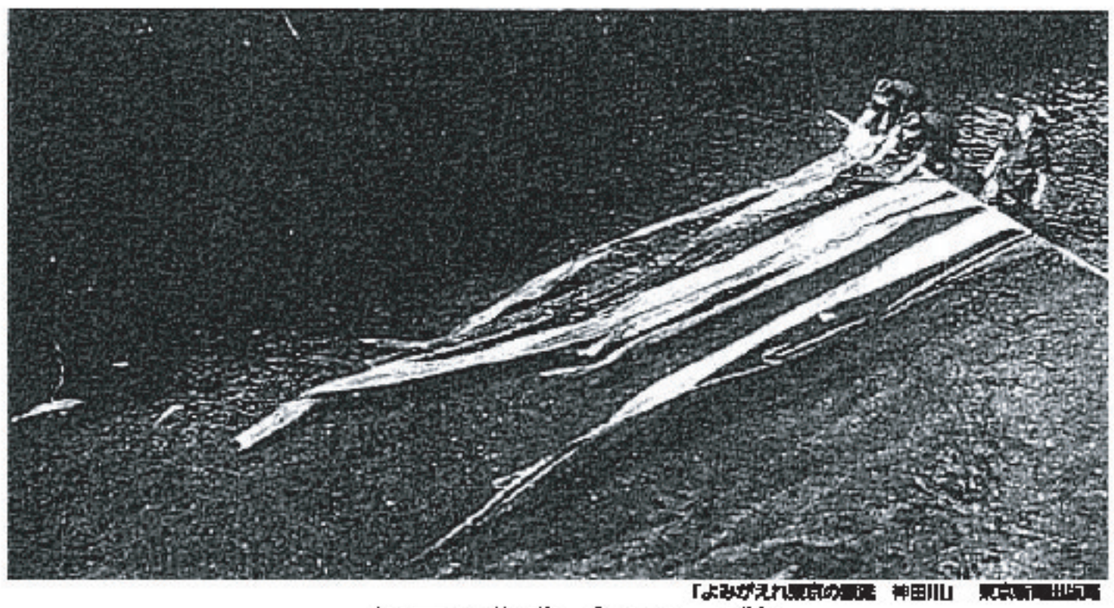
写真提供：伊藤 治氏

水車小屋（イメージ）

◆コラム「反物さがし」

紺屋では、ときに桿をふっていて反物が桿からはずれることがあった。当時は川にそった道はまだなく、他家の裏庭になっていた。両岸も護岸ではなく、雑木が自然に生えた状態のところが多かった。

流れた反物がこの雑木にひっかかることもあった。紺屋は、小舟を持っていて、流れてしまった大事な反物を追いかけてさがしたものだった。



「よみがえれ東京の面影　神田川」　東京新聞出版局

紺屋の作業（イメージ）